

研究ノート

前置詞inの「形状のin」に関する一考察 —TR=LMとなる用例に注目して—

藤原 隆史

松本大学教育学部学校教育学科

A Study on “The Shape As Boundary Sense” of the Preposition In:
Focusing on the TR=LM Type Construction

FUJIWARA Takafumi

Department of School Education, Faculty of Education, Matsumoto University

要 旨

英語の前置詞inには、「形状のin」と呼ばれる用法がある。これまでの研究で、この用法に対して一定の言語学的説明が行われてきた。しかしながら、当該の用法が確立するに至った理論的根拠が明確に示されておらず、用例の分類だけが行われるなど、言語的動機付けの解明が十分に行われているとは言えない。本研究は、当該の用法を認知意味論の立場から再検討し、言語的動機付けとその成立条件を明らかにし、教育的示唆を得ることを目的として行った。結果として、「形状のin」の言語的動機付けとその成立条件を導出することができ、用例の再検討を行うことでその確からしさが一定程度確かめられた。

キーワード

前置詞in 形状のin 言語的動機付け 認知意味論 イメージスキーマ変換

目 次

- I. はじめに
 - II. 先行研究とその問題点
 - III. 理論的考察
 - IV. 用例の再検討
 - V. 教育的示唆
 - VI. 結論
- 謝辞
注
文献

I. はじめに

英語の前置詞inには、「形状のin」と呼ばれる用法がある。これまでの研究で、この用法に対して一定の言語学的説明が行われ、この用法に当てはまると考えられる用例が示されてきた。しかしながら、先行研究で示された各用例をよく見てみると、当該の用法が典型的な意味から拡張するに至った理論的根拠が明確に示されておらず、それらの分類だけが行われるなど、言語的動機付けの解明が十分に行われているとは言えない状況である。本研究では、「形状のin」の用法を認知意味論の立場から再検討し、当該の用法が生じるに至った言語的動機付けを明らかにすること、また、その知見から教育的示唆を得ることを目的とする。

II. 先行研究とその問題点

本章では、先行研究における「形状のin」の用法の意味の記述とその問題点について言及する。

2.1. 形状のinの意味記述

英語の前置詞inの「形状のin」と呼ばれる用法について、Tyler & Evans (2003)¹⁾は以下のような用例を挙げている。

- (1) a. Ok, class, put your chairs in a circle.
 b. If fire breaks out get in single file before leaving.
 c. Can you get in line?

この用法の特徴は、前置詞の意味の記述で用いられるトラジェクター (trajector = TR) とランドマーク (landmark = LM)^{注1)}が、典型的な前置詞inの用法、すなわち、TR ≠ LMという関係性となるthe ball in the box等の例とは異なっていることであると考えられる。つまり、(1)に挙げた用例はTR = LM、あるいは、TRがLMとして捉え直されるような関係性になっていると考えられる。具体的に見てみると、(1a)においてはTRであるchairsを並べることによってLMであるa circleが形作られるし、(1b)ではTRである「避難する人」^{注2)}がLMであ

るsingle file (一列) になり、(1c)ではTRであるyouをLMであるlineの一部として捉えることが可能である。

安藤 (2012)⁴⁾も「形状のin」の用法を認め、以下の用例を挙げている。

- (2) a. The teachers resigned in a body.
 b. The rain came down in torrents.
 c. They were sitting in a circle.
 d. The villa is in flames.
 e. They went away in twos and threes.

これらの用例においても、TR = LMという関係性があることが分かる。すなわち、(2a, c, e)の用例ではTR (teachers, they, they)の寄せ集めがLM (a body, a circle, twos and threes)を形成し、(2b, d)の用例ではTR (rain, villa)がLM (torrents, flames)として捉え直されている。

さらに、平沢 (2021)⁵⁾も「形状のin」の用法を扱っている。ここでは、平沢 (2021)が挙げたものうち一部を抜粋して記載する。

- (3) a. Their ships travel alone or in small groups.
 b. The walls were lined with stuffed bookshelves, and more books were piled in leaning towers all over the room.
 (積み重ねパターン^{注3)})
 c. She seems to be wearing her Red Sox T-shirt and gray sweatpants, and her long hair is tied back in a ponytail.
 (髪型パターン)
 d. The singular first-person pronoun “I” should always be in a capital letter.
 (文字パターン)

平沢 (2021)によれば、TRは新たにLMとして「捉え直され再記述され」⁷⁾ているという。すなわち、元々個別の存在として捉えられていたTRが、積み重なったり寄せ集められたり、あるいは別のものとして捉え直されたりしてLMを形成しているということである。やはり、以上の用例でもTR = LMという関係性になっていることが分かる^{注4)}。

さらに、平沢 (2021)⁹⁾はTR = LMとは捉えら

れない（捉えにくい）用例も挙げている。

- (4) a. in italics
 b. in boldface
 c. in {italic / bold} type
 d. in paperback
 e. in {book, ebook, electronic, etc.} form
 f. in {ebook, electronic, PDF, JPEG, MP3, etc.} format

平沢 (2021) によれば、(4) の各用例は TR ≠ LM であるという。その理由として、(4a-c) は「in の目的語となる italics, boldface, type が指しているものが、描写しようとしている文字それ自体ではない」¹⁰⁾ からであるという説明をしている。平沢 (2021) によれば、a D in italics が許容される一方で *a D in an italic が不可であること、また、in boldface, in { italic / bold } type における boldface と type が不可算名詞であり、「文字という明らかに可算的な物体それ自体を指しているとは言いにくい」¹¹⁾ ことが TR と LM の不一致の根拠である。同様に、(4d-f) も LM が不可算名詞であることで、TR それ自体を指しているとは言えないという。例えば、It was issued in paperback. において、paperback が本それ自体を指すのであれば、*It was issued in a paperback. と LM が可算名詞になるべきであるが、実際にはそのようになっていないと平沢 (2021) ¹²⁾ は指摘している。

2.2. 先行研究の問題点と本研究の目的

先行研究で扱われている「形状の in」の用法をまとめると、以下の特徴があることが分かる。

(5) 「形状の in」の特徴

TR の積み重ねや寄せ集めによって LM が形成されたり、あるいは捉え直されたりしており、TR = LM の関係性が成り立つ。ただし、LM が不可算名詞の場合など、一部の用例では TR ≠ LM となっているものもある。

しかしながら、(5) の特徴に関する記述は不十分であると言わざるを得ない。なぜならば、「形状の

in」が典型的な in の用法とは異なり TR = LM という性質を持つ一方で、一部の用例ではその性質が見られないのはなぜなのか、換言すれば、TR = LM と TR ≠ LM の性質を持つものが混在しているのはなぜなのかを説明しなければならないからである。さらに、そもそも「形状の in」の用法における TR と LM が TR = LM という関係性になっている（あるいは、そのように捉え直されている）のはなぜなのか、その言語的動機付けも先行研究では十分に示されていない。

本研究では、以上の問題点を踏まえ、以下の2点を明らかにすることを目的とする。

(6) 本研究のリサーチクエスション

1. 「形状の in」が TR = LM という関係性を持つようになった言語的動機付けは何か。
2. 「形状の in」の用法で、TR = LM と TR ≠ LM という関係性を持つものが混在しているのはなぜか。

III. 理論的考察

本章では、前章で述べた先行研究の問題点に関して、新たな説明のための理論的考察とそれに基づく「形状の in」の成立条件を提示する。

3.1. 言語的動機付け

本節では、「形状の in」の用法がどのような言語的動機付けによって意味拡張しているのかを明らかにするための理論的考察を行う。典型的な「形状の in」の用例として、Tyler & Evans (2003) ¹³⁾ が挙げたものを以下に再掲する。

(7) Ok, class, put your chairs in a circle. (=1a)

この用例では、TR である chairs が LM である a circle を形成していると解釈される。前置詞 in は「容器」のイメージスキーマ (image schema = IS) で表現されるのが基本とされており (e.g. Lakoff, 1987 ¹⁴⁾; Langacker, 1987 ¹⁵⁾; Dirven, 1993 ¹⁶⁾; Tyler & Evans, 2003 ¹⁷⁾; 花崎・加藤, 2009 ¹⁸⁾; 安藤, 2012 ¹⁹⁾; 中右, 2018 ²⁰⁾)、TR と LM は別々の存在物である。

前述の通り、TR ≠ LMという関係性が成り立つ。一方で、(7) ではTRの寄せ集めがLMを形成することでTR = LMとなっている。この際に働いている認知的プロセスについて、本研究では「複数個体-連続体のイメージスキーマ変換」(multiplex-mass image-schema transformation) (Lakoff, 1987²¹⁾; 篠原, 2019²²⁾ が起こっていると考える。篠原 (2019)²³⁾ は、このIS変換の具体例として以下を示している。

- (8) a. The railway track ran along the road.
 (1次元) —————
 (線路が道に沿いに走っていた) (ママ)
- b. There were soldiers posted along the road.
 (複数個体) - - - - -
 (兵士たちが道路沿いに配置されていた)

篠原 (2019) は、(8b) では複数個体である兵士を(8a)の線路のように連続体として認知する読み替えが行われていると述べている。このような読み替えは、認識の対象を「距離を置いて見る」²⁴⁾ 場合に生じるという。すなわち、距離を置いて見ることによって複数個体の集合がその総和以上のゲシュタルト²⁵⁾ の意味を持つものとして新たに認知されたということになる。

さらに、このIS変換について、典型的な前置詞inのISからの意味拡張という観点から考える必要がある。前置詞inのISとして、例えば榎山・深田 (2003)²⁶⁾ は図1を示している。

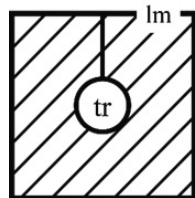


図1. inのイメージスキーマ

認知意味論では、図1のようなISから比喩的意味拡張によって各用法が説明されている。具体的な物理領域で適用される意味として、Tyler & Evans (2003) は、典型的な用法の他に「部分的内包 (partial inclusion)」²⁷⁾ や「非典型的な有限ランドマーク (non-canonical bounded LMs)」²⁸⁾ といった用法を

挙げている。

- (9) a. The sweater was in a beautifully wrapped box.
 b. The flower is in the vase.
 c. The child couldn't be seen in the crowd.

上記の用例のうち、(9a) は典型的な用例、(9b) は部分的内包、(9c) は非典型的な有限ランドマークの例である。(9a) と (9b) に関しては、TR ≠ LMの関係性が認められるが、Tyler & Evans (2003) によれば、(9b) は (9a) の用法が持つ、LMが内容物であるTRの位置を制限するという機能的側面に焦点が当たった用法であり、(9b) においてはTRであるflowerはLMであるthe vaseによって位置的制約を受けていることになる」と説明されている。一方で、(9c) のような用例に関してTyler & Evans (2003) は、「群衆のような集合的存在物は単一のかたまりとしての存在物として知覚され、(中略) ランドマーク (the crowd) は有限空間を占有するものとして解釈されうる」(訳は国広・木村, 2005²⁹⁾) と述べている。すなわち、(9c) において、LMであるthe crowdは個の集合体として捉え直されて認識された結果であり、TRであるthe childはそのLMの「構成要素」であると考えられることができる。この際に、複数個体であった人々が集まることで連続体としての群衆になっていると考えることができ、複数個体-連続体のIS変換が起こっていると考えられる。この考え方に基づけば、図1のようなISでは説明に苦慮する以下のような用例も説明可能である。

- (10) a. There's already oxygen in the air, so some people...
 (Corpus of Contemporary American English = COCA)³⁰⁾
- b. a hole in the sweater
 (ウィズダム英和辞典)³¹⁾

(10a) では、TRであるoxygenがLMであるthe airの「構成要素」として捉えられている。また、(10b) では、TRであるa holeはLMであるthe sweaterの「空の構成要素」(Herskovits, 1986³²⁾; 奥野, 2013³³⁾)

と考えることで説明が可能である。

ここで、上記で触れた「形状のin」の(7)の用例について考えてみると、元は別々の存在物として捉えられていたchairsがLMであるa circleの「構成要素」となっていることが分かる。すなわち、複数個体-連続体のIS変換によって、複数個体であるTRの集合体が連続体として認識され、さらにそれがゲシュタルト的に単一のかたまりのように知覚されたことになる。別の言い方をすれば、TRがLMとして「捉え直された」ということであり、この時点でTRとLMは同一のもの、すなわちTR = LMと認識されていることになる。以上の議論から、本研究では「形状のin」の言語的動機付けとして、複数個体-連続体のIS変換と、それによるTRの捉え直しによるLMの概念化を提案する。

3.2. TR=LMとTR≠LMの混在

もう一つの問題点として、TR=LMとTR≠LMという関係性が混在しているのはなぜかというものがあつた。平沢(2021)が挙げた用例をさらに抜粋して再掲する。尚、平沢(2021)は以下の(11)の用例が(3)の「形状のin」の用例に「非常によく似ていて微妙に異なる」³⁴⁾用例であると述べている。

- (11) a. in italics
 b. in boldface
 c. in { italic / bold } type
 d. in paperback
 e. in book form
 f. in ebook format

平沢(2021)は、これらの用例がTR≠LMとなっていることの理由として、統語的不規則性を挙げている。特に(11a)以外の用例では^{註6}、LM位置に不可算名詞が置かれているためTRとLMが統語的に一致しないことを指摘している。英語において不可算名詞が用いられる際、不可算名詞は決まった形を持たず、その境界は曖昧であるとされている(Langacker, 1987³⁵⁾, 2013³⁶⁾)。すなわち、LM位置に不可算名詞がきている用例は、「形状のin」の用法におけるLMが本来持っているはずの「形状」を持っておらず、LMが抽象的な概念を表している

と考えられる。

上記に関連して、名詞が抽象名詞化し無冠詞で用いられている例は、前置詞inに限らず英語で広く観察される。抽象名詞が無冠詞で用いられているものとして、以下の安藤(2005)³⁷⁾が挙げている例がよく知られている。

- (12) a. He was president of the Union.
 b. He came by bus/car/boat/train/plane.

上記の例の場合、名詞の意味が抽象化されることで役職等に備わった「機能」の面、あるいは、前置詞のLM位置にくる名詞が持つ「機能」やその場所で行われる「活動」に焦点を移すことができる。すなわち、(12a)では安藤(2005)が説明している通り、「名詞は『個体』というよりも『役職』という機能を表している」³⁸⁾と考えられるし、(12b)ではLMの機能面に焦点が当たることで、移動のための「手段」として捉えられている。さらに、以下の(13)はウィズダム英和辞典³⁹⁾からの例である。

- (13) go to school

(13)のschoolは建物としての学校ではなく、教育機関としての学校の機能面に焦点が当たり、「学校に通う」といった意味に解釈される。Tyler & Evans(2003)⁴⁰⁾も同様の例を挙げている。

- (14) a. She is in prison.
 b. A: What's his line of work?
 B: He's in the governor's office
 [=works for the governor]
 c. She wrote in ink.
 d. He spoke in Italian.

(14a)のprisonは、建物としての牢獄ではなく牢獄の機能面に焦点が当たり、「服役中」といった意味に解釈される。さらに、(14b-d)はTyler & Evans(2003)が言う「手段義」⁴¹⁾の例である。Tyler & Evans(2003)によると、前置詞inのLMで表される「場所」がそこでの「活動」を表し、さらにその「活動」を行う際の「手段」がinの意味としてメトニミー的に拡張しているという。すなわ

ち、(14b)では、「場所」とそこで行われる「活動」とがメトニミー的に結びつくことで「知事の下で働いている」といった「活動」の意味をinが仲立ちできるようになっている。さらに、(14c, d)ではより拡張が進んで、「活動」が行われる際の「手段」がinによって仲立ちされているとTyler & Evans (2003)⁴²⁾は説明している。この際、(14c, d)の用例から分かる通り、LMは不可算名詞・抽象名詞によって表現され、その名詞が持つ「文字を書く」あるいは「イタリア語で話を通じさせる」といった「機能」の側面に焦点が当たっていると考えることができる。

前置詞inのこのような機能面への意味拡張は、歴史的に見ても、典型的な用法である「容器」の意味用法からの拡張であると考えられる。Oxford English Dictionary (OED) 第2版⁴³⁾による前置詞inの記述を確認すると、“Of place or position in space or anything having material extension: Within the limits or bounds of, which (any place or thing)”という典型的な用法の初出が西暦700年以前、“After *in*, the article is often omitted, esp. when the function of the place is the prominent notion”と説明される機能面への意味拡張が起こっている用法の初出が西暦1175頃となっている。このことから、LMが「容器」とされる典型的な用法からLMが「機能」を表している用法へ意味が拡張したことが確かめられる。

この性質を「形状のin」の用法に当てはめて考えてみると、LMが具体的な「形状」を持たず抽象化されることで、何らかの「機能」を表していると解釈されていると考えることができよう。実際に(11a-c)の用例では、文字を斜体や太字体にすることで、その部分を「強調する」といった「機能」の側面に焦点が当たっているし、(11d-f)では内容を伝えるための媒体としての「機能」の側面に焦点が当たっていると考えることができる。平沢(2021)⁴⁴⁾も指摘しているように、(11d-f)のような用例は利用・消費と関係した動詞句と結びつくことが多く、媒体の「機能」として利用・消費を可能にしているといった文脈で用いられる傾向があると考えられる。

以上の議論で、「形状のin」の用法におけるLMが具体的な「形状」を持たず抽象化され「機能」の側面が焦点化されることで、TRがLMの「構成要素」

であるという側面を捉えることができなくなったことを示した。その結果として、統語的に一致しない、あるいは、TR = LMという関係性が感じられなくなったと考えられる。

3.3. まとめ

本研究では、3.1節及び3.2節の理論的考察から、以下のような「形状のin」の成立条件を提案する。

(15) 「形状のin」の成立条件

1. 「形状のin」において、複数個体-連続体のIS変換によってTRの集合体がLMの構成要素となり、ゲシュタルト的に単一の構造体と見なされTR = LMとして捉え直される。
2. 「形状のin」において、LMが抽象化されることでTRがLMの「構成要素」と捉えにくくなり、具体的な「形状」から「機能」の側面に焦点が当たることでTR = LMという関係性で捉えにくくなる。

IV. 用例の再検討

本章では、(15)に基づいて、2章で挙げた「形状のin」の用例のうち、付言すべきであると思われる一部の用例の再検討、及び、新たな用例について言及し、「形状のin」の成立条件^{註7)}が妥当であることを示す。まず、平沢(2021)が指摘した*in italics*の統語的不一致について述べる。

4.1. *in italics*について

平沢(2021)⁴⁵⁾が挙げていた用例のうち、統語的にTR = LMという条件を満たさず問題になり得るものとして(11a)の*in italics*があった。成立条件2に従えば、「機能」の側面に焦点が当たる場合は抽象名詞化されていなければならないはずである。しかし、(11a)の*italics*は複数形となっている。本研究では、この*in italics*という用例はイデオム化し複数形が定着したものであり、-sという形態素が本来の意味を失っているものであると主張する。(11)で示したその他の例におけるLMは

boldface, type, paperback, form, formatであるが、これらのLMは純粋な名詞であると考えられる一方で、italicsの語源を辿ると、形容詞として用いられたことが最初であると考えられる。OED⁴⁶⁾の記述を確認したところ、1615年に“If I haue added any thing to helpe the English, that we haue caused to be imprinted in an Italica letter.”という形容詞としての用例が最初である。前置詞inの目的語位置での名詞としての初出は1676年の“From the Bottom to the Foot is 12 of them in Romans and Italicks.”という用例であるが、以下の(16)にあるように、その後に出現する使用例では単数形と複数形の間で揺れが見られる。

(16) italicの名詞としての使用例

1676 J. Moxon *Regulæ Trium Ordinum* 8
From the Bottom to the Foot is 12 of them
in Romans and Italicks.

1676 J. Moxon *Regulæ Trium Ordinum* 3
I..have elected them for a Patern in Romans
and Italicks.

1712 R. Steele *Spectator* No. 455. ¶6 I
Desire you would print this in Italick, so it
may be generally taken notice of.

c1823 T. Howes in *S. Parr's Wks.* (1828)
VIII. 194 The names in italic are those
supplied by the editors.

1824 J. Johnson *Typographia* II. 22 In
Roman, f and j are the only kerned letters;
but, in Italic, *d,g,j,l,y* are kerned on one side,
and *f* on both sides of its face.

1889 T. MacKellar *Amer. Printer* (ed. 17)
61 There are..descending letters in both
Roman and Italic.

1898 A. W. W. Dale *Life R. W. Dale* ix.
217 In the book, the sentence in italics is
developed into an entire lecture.

1989 *PC Mag.* (U.K. ed.) May 139/3
They cost between £66 and £99 for each
complete type family in bold, italic, bold
italic and roman.

(下線部は筆者による)

現代英語においても、COCA⁴⁷⁾でin italicを検索すると1992年から2019年の間に14件のヒットがあり、使用の揺れがまだ続いていることが分かる。これらのことから、(11a)におけるitalicsはitalicとの使用の揺れの結果、斜体を用いて「強調する」という機能を保持したまま形態的には複数形がイデオムとして定着したものであると考えられる。

4.2. TR=LMとなる用例1

(15)で挙げた成立条件は、TRがLMの「構成要素」と捉えられTR=LMの関係性があると認識されるためには、非抽象的な名詞句、すなわち、不定冠詞を伴った可算名詞か可算名詞の複数形が用いられている必要があることを意味している。この原則に照らし合わせると、(1a-b)、(2a, c, e)、(3)の各用例は個別的TRの積み重ねや寄せ集めが新たな構造体としてのLMとして捉えられているという説明で問題ないと考えられる。この原則に当てはまらないと思われる例として、以下が挙げられる。

- (17) a. Can you get *in line*? (=1c)
b. The rain came down in torrents. (=2b)
c. The villa is in flames. (=2d)

これらの例のうち、(17a)はLMであるlineが無冠詞であり成立条件2が適用されると考えられる。同様の例として、平沢(2021)⁴⁸⁾も|stand/sit| in (a) lineという用例を挙げている。この用例では、TRとLMの関係性に注目すると、TRが「列」の構成要素になると認識された場合にはTR=LMとなるが、「列」そのものが果たす「順番を守る」ための機能面に注目すれば、物理的な列の形状は問題にならない^{註8)}。その場合にLMが抽象名詞化した形が用いられ、それが定着しているとも考えることも可能である。尚、get in a line/get in lineをCOCA⁴⁹⁾で検索すると、前者が13件、後者が662件となっている^{註9)}。すなわち、不定冠詞の有無において若干の揺れが見られるが、get in lineのように不定冠詞の無い使用例が定着しつつあると言ってよいだろう。また、(17b)ではTRが不可算名詞(物質名詞)のrainであるが、この文脈では「一降りの雨」という意味であり、このTRがLMである「土砂降り」と捉え

直されていると考えられる。さらに、(17c)では、元々のTRである「別荘」が、篠原(2019)の言うようにある程度離れた場所から観察されることで、ゲシュタルト的に別のもの、すなわち、LMであるflamesと捉え直されたものであろう。通常、燃え盛る建物に近づくことは危険であり、ある程度の距離から観察されることが前提となる。尚、(17b, c)におけるTRは複数個体ではないが、成立条件1における「ゲシュタルト的な単一の構造体」が複数個体から構成されている必要はない。すなわち、ゲシュタルト的認知は、同一物体が見方によって複数の見え方があることも含んでおり、単一のTRが別のものであると捉え直されLMとして認識されるということを防げるものではない¹⁰。

4.3. TR=LMとなる用例2

ここからは、2節で触れたもの以外の用例について見ていく。成立条件に従えば、これまで先行研究が「形状のin」として扱ってこなかった用例の中には、実は「形状のin」の用例、及び、それと同様にTR=LMの性質を持っている用例が含まれている可能性がある。まず、現実世界において実態を伴ったTRとLMが用いられている例を示す。猪浦(2020)⁵²は以下の(18)の例を挙げている。

- (18) The “sardana”, the typical dance of Catalonia, is danced in a ring.

猪浦(2020)は(18)について、「ある状態、状況をinで表す」⁵³としているが、この説明では不十分であると言わざるを得ない。すなわち、(18)については、Tyler & Evans(2003)や平沢(2021)が挙げているものと同様に、TRである複数の「踊り手」(文脈から明らか)がLMであるa ringを形成しているということで説明され、成立条件1を満たしており、「形状のin」の用法であると考え方が妥当であろう。

続いて、すずき・ミツイ(2018)⁵⁴は以下の(19)の例を挙げている。

- (19) Miss Hong wants us to work in pairs.

この例において、TRはusでありLMはpairsである。やはり、成立条件1に照らし合わせれば、TRの寄せ集めがLMのpairsを形成するという解釈で問題ないであろう。

ここまでで見た(18)と(19)の例は、TRとLMが実態を伴った現実世界の事物や人として物理的に知覚可能なものであるが、以下に物理的実態を伴わないが、LMがTRの「捉え直し」と考えられる用例を示す。清水(2021)⁵⁵は以下の例を挙げている。

- (20) a. In a sense, he is a genius.
b. In a word, he is a genius.
c. He seldom speaks: in other words, he is a man of few words.

これらの用例では、TRについて若干説明が必要である。すなわち、これらのフレーズは必ず何らかの文脈を必要とするはずである。そして、これらのフレーズはその文脈の中ですでに述べられている内容¹¹を「言い換える」役割を果たしている。統語的にも、副詞的に文頭(節の頭)に置かれていることから、前の文脈の内容を受けての言い換えが行われていると考えることができる。したがって、(20)ではTRが表す文脈における既出事項が、LMであるa sense, a word, other wordsとして捉え直されていることになり、TR=LMという関係性が成り立つ。また、当該フレーズが文末に置かれる場合(e.g. He is a genius in a sense.)でも、「彼は天才である」という前半部分の内容がTR、a senseがLMと考えれば矛盾はない。

同様に、物理的な実態は伴わないがTR=LMと考えられる例として、以下の安藤(2012)⁵⁶の例を挙げる。

- (21) You must speak in a loud voice.

この用例では、LMであるa loud voiceを「容器」のISから説明することは困難であろう。なぜなら、その場合「あなたは大きな声の中で喋らなければならない」となり意味をなさないからである。むしろ、LMはTRの「捉え直し」と考えるべきである。その場合、TRはyou must speakではなく、喋った結果発せられる言葉と考えるべきであろう。そうす

れば、TRである「発せられる言葉」が捉え直されてLMである a loud voice と認識されることになり、TR = LM が成り立つことになる。

さらに、すずき・ミツイ (2018)⁵⁷⁾ は (22) の例を挙げている。以下の例では、LM位置にくる名詞が無冠詞で用いられ、これまで見てきた用例よりもさらに抽象度が上がっていると考えられる。

- (22) a. There are 4 kids in total.
b. There are 4 kids in all.

これらの例において、TRはいずれも 4 kids であるが、4人の子どもが寄せ集まってLMである total, all を形成していると考えれば、成立条件と矛盾しない。ただし、(22) の用例は (18) や (19) の用例とは異なり、LMは「総量」や「全体」の概念であって、LMが無冠詞であることから、現実世界における実態を伴った存在物ではないことが分かる。すなわち、(22) の用例は成立条件2にあるように、「形状」を持たない抽象的なLMであり、「総量」や「全体」の意味を表す「機能」を果たしていると考えられる。

抽象化がさらに進んだものとして、清水 (2021)⁵⁸⁾ が挙げている以下の用例も注目に値する。

- (23) a. In brief, the project was a success.
b. In general, women live longer than men.
c. Do you have any plans in particular?
d. Put the names in alphabetical order.

これらの例は「様態」や「状況」と説明されたり、単純にイディオム的に列挙されたりすることがしばしばあるが、前置詞 in の「容器」のISからの説明に拘泥するあまり、説明が破綻してしまう可能性がある。例えば、(23a) では「簡潔の中」、(23b) では「一般原理の中」、(23c) では「特別事項の中」、(23d) では「順番の中」とそれぞれ説明したとしよう。しかし、「簡潔の中でプロジェクトが成功だった」、「一般原理の中で女性は男性よりも長く生きる」、「特別事項の中で何か計画があるか」、「順番の中で名前を並べる」といった意味解釈はどこか不自然である。むしろ、TRとLMの関係性は「捉え直し」であると考えの方がうまく説明できる。すなわち、(23a) では (20) で示した用例と同様に、文脈の中

ですでに述べられている事柄をTRと考え、それにより「簡潔なもの」として捉え直すことで「簡潔に言えば・要するに」といった意味解釈で問題ないことになる。(23b) でも、それ以前に述べられている事柄がTRであり、それを「一般論」、すなわち「女性は男性よりも長く生きる」というLMとして捉え直している。(23c) では、TRである plans がLMである「特別事項」として捉え直され、(23d) ではTRである names がLMである「アルファベット順」と捉え直されている。このように考えることで、「容器」のISからは説明しにくい用例も、LMはTRの「捉え直し」であるという考え方をを用いることでうまく説明できる。もちろん、成立条件2にあるように、(23) の用例は具体的な「形状」を持っておらず、それぞれの意味を表す「機能」が焦点化されていると考えられる。

4.4. 歴史的側面からのサポート

これまで見てきたTRの捉え直しによるLMという考え方は、以下の (24) に示すように、前置詞 in の古い時代の用法を見ることによって歴史的にも支持される。(24) は Tyler & Evans (2003)⁵⁹⁾ からの引用である。

- (24) In Old English, *in* could be employed either to mark location within a bounded LM or to express orientation towards the LM. The former was expressed in conjunction with dative case marking, and the latter by virtue of accusative marking. By Middle English these case distinctions had disappeared and the orientation meaning associated with uses of *in* + accusative came to be coded with the compound preposition *into*.

Tyler & Evans (2003) が指摘している通り、古英語時代の in には2つの用法、すなわち、LMへの動きを伴わない与格 (dative) 用法とLMへの動きを伴う対格 (accusative) 用法があったが、中英語期以降には格変化によるこれらの用法の使い分けが徐々に行われなくなっていったと考えられる。そし

て現代英語においては、物体同士の空間関係を表す与格用法が前置詞inの主な用法として定着している。一方で、対格用法が完全に用いられなくなったわけではなく、「変化結果」(resultative)を表すinの用法としてその名残をとどめている。以下の(25)は江口(2022)⁶⁰⁾が示している変化結果を表すin/into前置詞句の用例である。

- (25) a. John broke the stick into pieces.
b. John broke the stick in pieces.

江口(2022)によれば、(25a)では目的語(the stick)の変化結果をinto結果句で表しているが、(25b)にあるようにin結果句でも同様の意味を表すことができるという。(25)の用例は、前置詞inの中心義とされる「容器」のISからでは説明できないが、Tyler & Evans(2003)⁶¹⁾が指摘しているinの対格用法であると考えれば説明することが可能であると考えられる。以上のことから、「形状のin」等に見られるTR=LMという関係性になっている用法は、古英語時代の対格用法の名残りであり、TRの「変化結果」としてのLM、すなわち、TRの捉え直しによるLMの用法であるという考え方が歴史的にも支持されると言えるであろう。

4.5. まとめ

本章では、3.3節で提示した「形状のin」の成立条件が、先行研究で示されている各用例をうまく説明できているか確認した。上記で確認した用例では、「複数個体-連続体のIS変換」によってTRが新たなLMとして「捉え直され」、TR=LMの関係性があることを述べてきた。また、成立条件2において、LMが具体物ではなく無冠詞で用いられている場合、「機能」の側面が焦点化されていることも述べた。このことに関しても、3.2節の内容と4.3節での用例の検討を通して、ある程度その妥当性が確かめられたと考える。さらに、通時的にもTR=LMの関係性になっている用例における前置詞inが古英語時代の対格用法の名残りである可能性を示した。以上のことから、(15)の「形状のin」の成立条件が妥当であり、(6)で示したりサーチクエスションへの解答としても一定の説得力を持つということが

できよう。

V. 教育的示唆

前置詞inの「形状のin」の用法について、本研究の考察は何らかの教育的示唆をもたらすだろうか。前節までですでに述べた通り、「形状のin」の用法は典型的な前置詞inの「容器」のISからは説明に苦慮する用法である。その理由は、「容器」のISが持つTR≠LMという関係性が、「形状のin」の用法が持つTR=LMという関係性と相容れず、直観的な認識と一致しないからであろう。その理由は、3節で述べたような認知プロセスを経ているからであり、教育においても典型的な前置詞inの用法とは異なったものとして教えるべきであると考えられる。一方で、一般向けの学習用参考書の中には、「容器」のISからの説明に拘るあまり、実態とは異なった解釈から解説しているものも散見される。清水(2021)⁶²⁾の挙げている用例を示す。

- (26) a. They are standing in a line.
b. in a row
c. Are you travelling in a group?

清水(2021)の挙げている用例は、すでに説明した「形状のin」の用例であるが、清水(2021)はこれらの用例を図1で示されるような「容器」のISから説明している。例えば、(26a, b)については「線の『内側』」⁶³⁾、(26c)については「集団という『状態』」⁶⁴⁾と記述している。つまり、清水(2021)はこれらの用例を「形状のin」とは別の用法、すなわち、(26a, b)を「内包」、(26c)を「状態」として説明している。しかしながら、すでに述べてきたように、成立条件1に従うと、これらの用例は複数のTRが構成要素となってLMを形成していると説明すべきである。

本研究は、前置詞inの全ての用法を中心義からの画一的な意味拡張で説明することはできないと考えている。そのため、「形状のin」の用法に関しても別物として教えるべきであると主張する。

VI. 結論

本研究は、英語前置詞inの「形状のin」の用法について、先行研究の問題点を指摘し、新たな説明として主に以下の2点を示した。1点目は、当該の用法が典型的な前置詞inの用法で用いられる「容器」のISではなく、「複数個体-連続体のIS変換」によってTRがゲシュタルト的な構造体として再認識されLMを形成するという認知プロセスに基づいていることである。さらに2点目として、当該の用法がTR = LMの関係性だけでなく、LMの抽象化によって「機能」面に焦点が当たり、TR ≠ LMという関係性をも持つに至った認知プロセスについても示した。また、本研究から得られる教育的示唆として、「形状のin」の用法は「容器」のISとは異なるものとして示すべきであると主張した。本研究の課題として、具体的なコーパス等のデータが一部の議論において不足している点が挙げられる。前置詞inの「形状のin」の用法については、今後さらにコーパスデータ等を収集するとともに、統計的な分析も採り入れながら考察を深める必要があると考えられ、この点については今後の課題としたい。

謝辞

本研究は、JSPS科研費JP22K00746及びJP20K00841の助成を受けたものである。この場をお借りして感謝申し上げます。

注

- 注1 通常TRは比較的小さく目立っていて動きがある物体であり、LMは大きめで目立たず動かない物体である。また、LMは前置詞の直後の名詞句として表現される。(Lakoff, 1987²⁾; Langacker, 1987³⁾)
- 注2 「避難する人」は言語形式としては表現されていないが、文脈上明らかであろう。
- 注3 (3b-d)の各引用の最後に示した「積み重ねパターン」、「髪型パターン」、「文字パターン」は平沢(2021)⁶⁾の説明による。
- 注4 平沢(2021)は「同一物の捉え直し」⁸⁾という言葉方をしている。
- 注5 ゲシュタルトについて辻(2013)は、「視野にある対象を1つのまとまりのあるものとして知覚する心的作用を体制化(organization)と言い、体制化によって形成されるまとまり(構造体)をゲシュタルトと言う」²⁵⁾と説明している。
- 注6 (11a)については4章で述べる。
- 注7 これ以降、単に「成立条件」と表記する。
- 注8 仮にまっすぐな列ではなく「団子状」に人が集まっても、並んでいる一人ひとりが「順番」を意識していれば、列の形状とは関係なく秩序を維持するという「機能」が果たされることになる。
- 注9 British National Corpus (BNC)⁵⁰⁾ではget in a lineが1件、get in lineが3件である。
- 注10 「ルビンの盃」(松本, 2003)⁵¹⁾では、単一の個体である1つの絵に2通り以上の見え方がある好例としてしばしば用いられている。

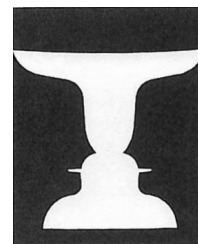


図2. ルビンの盃 (松本, 2003)

- 注11 (20a, b)においては代名詞heが指している人物について言及されている内容等、(20c)においてはHe seldom speaksがすでに述べられた内容である。

文献

- 1) Tyler A and Evans V, *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning, and Cognition*, Cambridge University Press, p.196, (2003).
- 2) Lakoff G, *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, (1987).

- 3) Langacker RW, *Foundations of Cognitive Grammar* (Vol.1) : *Theoretical Prerequisites*, Stanford Univ. Press, (1987).
- 4) 安藤貞雄, 『英語の前置詞』 開拓社, pp.44-45 (2012).
- 5) 平沢慎也, 『実例が語る前置詞』 くろしお出版, pp.218-222 (2021).
- 6) 同上, pp.218-222.
- 7) 同上, p.217.
- 8) 同上, p.228.
- 9) 同上, pp.223-226.
- 10) 同上, p.223.
- 11) 同上, pp.223-224.
- 12) 同上, p.226.
- 13) Tyler A and Evans V, *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning, and Cognition*, Cambridge University Press, p.196, (2003).
- 14) Lakoff G, *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, (1987).
- 15) Langacker RW, *Foundations of Cognitive Grammar* (Vol.1) : *Theoretical Prerequisites*, Stanford Univ. Press, (1987).
- 16) Dirven R, "Dividing up Physical and Mental Space into Conceptual Categories by means of English Prepositions". *The Semantics of Prepositions: From Mental Processing to Natural Language Processing* 3, pp.73-98, (1993).
- 17) Tyler A and Evans V, *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning, and Cognition*, Cambridge University Press, (2003).
- 18) 花崎一夫, 加藤鉦三, 「前置詞の棲み分け: in と on を中心にして」『中部英文学 (英文学研究支部統合号)』 1, pp.233-242 (2009).
- 19) 安藤貞雄, 『英語の前置詞』 開拓社 (2012).
- 20) 中右実, 『英文法の心理』 開拓社 (2018).
- 21) Lakoff G, *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, (1987).
- 22) 篠原俊吾, 「イメージ・スキーマ」辻幸夫 (編) 『認知言語学大事典』 朝倉書店 (2019).
- 23) 同上, p.297.
- 24) 同上, p.297.
- 25) 辻幸夫 (編), 『新編認知言語学キーワード辞典』 研究社, p.89 (2013).
- 26) 榎山洋介, 深田智, 「意味の拡張」松本曜 (編) 『認知意味論』 大修館書店, p.102 (2003).
- 27) Tyler A and Evans V, *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning, and Cognition*, Cambridge University Press, p.182, (2003).
- 28) 同上, p.184.
- 29) 国広哲弥, 木村哲也, 『英語前置詞の意味論』 研究社, p.228 (2005).
- 30) Davies M, *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*, <https://www.english-corpora.org/coca/> (2008-).
- 31) 『ウイズダム英和辞典第3版』三省堂.
- 32) Herskovits A, *Language and Spatial Cognition*, Cambridge University Press, (1986).
- 33) 奥野忠徳, 「英語前置詞INの意味分析」『弘前大学教育学部紀要』 110, pp.107-116 (2013).
- 34) 平沢慎也, 『実例が語る前置詞』 くろしお出版, p.223 (2021).
- 35) Langacker RW, *Foundations of Cognitive Grammar* (Vol.1) : *Theoretical Prerequisites*, Stanford Univ. Press, (1987).
- 36) Langacker RW, *Essentials of Cognitive Grammar*, Oxford University Press, (2013).
- 37) 安藤貞雄, 『現代英文法講義』 開拓社, pp.468-469 (2005).
- 38) 同上, p.468.
- 39) 『ウイズダム英和辞典第3版』三省堂.
- 40) Tyler A and Evans V, *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning, and Cognition*, Cambridge University Press, pp.188-190, (2003).
- 41) 同上, p.190.
- 42) 同上, p.190.
- 43) *The Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM Version 4.0 for Windows*, Oxford University Press, (2009).
- 44) 平沢慎也, 『実例が語る前置詞』 くろしお出版, p.226 (2021).
- 45) 同上, p.223.
- 46) *The Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM Version 4.0 for Windows*, Oxford University Press, (2009).
- 47) Davies M, *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*, <https://www.english-corpora.org/coca/> (2008-).
- 48) 平沢慎也, 『実例が語る前置詞』 くろしお出版, p.217 (2021).
- 49) Davies M, *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*, <https://www.english-corpora.org/coca/> (2008-).
- 50) BNC Consortium, *British national corpus. Oxford Text Archive Core Collection*, (2007).
- 51) 松本曜, 「認知意味論とは何か」松本曜 (編) 『認知意味論』 大修館書店, p.9 (2003).
- 52) 猪浦道夫, 『英語前置詞大講座』 DHC, p.195 (2020).
- 53) 同上, p.195.
- 54) すずきひろし, ミツイ直子, 『イメージで比べてわかる前置詞使い分けBOOK』 ベレ出版, p.53 (2018).
- 55) 清水建二, 『イラストでイメージがつかめる英語の前置詞使いわけ図鑑』 株式会社アスコム, pp.30-31 (2021).
- 56) 安藤貞雄, 『英語の前置詞』 開拓社, p.33 (2012).

- 57) すずきひろし, ミツイ直子, 『イメージで比べてわかる前置詞使い分けBOOK』 ベレ出版, p.53 (2018).
- 58) 清水建二, 『イラストでイメージがつかめる英語の前置詞使い分け図鑑』 株式会社アスコム, pp.35-37 (2021).
- 59) Tyler A and Evans V, *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning, and Cognition*, Cambridge University Press, p.198, (2003).
- 60) 江口巧, 「変化結果を表す in/into 前置詞句の交替について」 『英文学研究支部統合号』 14, p.35 (2022).
- 61) Tyler A and Evans V, *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning, and Cognition*, Cambridge University Press, p.198, (2003).
- 62) 清水建二, 『イラストでイメージがつかめる英語の前置詞使い分け図鑑』 株式会社アスコム, pp.21-33 (2021).
- 63) 同上, p.21.
- 64) 同上, p.33.